KITA NO MACHI NO NEWS LETTER

No.3 2022 冬-春号

キタのまちのニュースレター

落語×アートの祭典スタート！

大淀コミュニティセンターで「落語とビジュアルアートのアニュアーレ」という、若手噺家とアートを学ぶ学生が創作落語からオリジナル絵本が誕生する夢を追いかける新しい試みが行われました。その様子をご紹介いたします。

※写真は当日の若手落語家８人の熱演

大淀コミュニティセンターを異なる文化が出会う拠点にしたい。このイベントはそんな想いから生まれました。それぞれの創作界を担う若者が出会い、刺激しあうことで、つながりを生み出そうというものです。

８人の若手落語家が、テーマとなる３つのお題をくじ引きで決定し、一見バラバラなジャンルのテーマを組み合わせて、ひとつの噺として完成させる「三題噺（さんだいばなし）」の創作に挑みました。この「三題噺」は、今回の試みのために創作された新作の落語です。そして、落語を体験したアートを学ぶ学生やデザイン系の仕事に従事する若者が、その落語から着想を得て「1枚の絵」を描きます。最終的にはどちらの作品からも優秀作が選ばれ、絵本化へとつながっていきます。

ちなみに「アニュアーレ」とは【年に1回】を意味しており、この「新しい落語から新しい絵本を」という夢を追求する「落語×アートの祭典」を大淀コミュニティセンターで、これから先も年に1回開催します。

イベント当日には約80人の観客が集まりました。客席はさまざまな年代の方がおり、半分は絵を学ぶ若い学生たちでした。もともと大淀コミュニティセンターや北区民センターには、幅広い年代の方が来館されます。しかし、このような形で一同に会するということは珍しく、このイベントならではの光景と言えるでしょう。

披露された落語はどれも、若手落語家たちの個性を活かしており、中にはおとぎ話のような世界観もありました。会場が笑いに包まれる中で、この落語がどんな絵になるのだろうと想像する楽しみもあります。こうした期待があるのも異なる分野のコラボレーションが実現したからです。

もともと大淀コミュニティセンターではいろいろなジャンルの方が活動されています。その中で他分野にも興味をもつキッカケができれば、地域の人々のつながりができるのではないかと考え、本イベントの開催に至りました。交流の幅を広げていくことで、自身の創作をさらに飛躍させることができるのではないでしょうか。

イベントのチラシに使用された作品
Made by Yori

アニュアーレ情報

写真の8名が出演し『繁昌亭アニュアーレ』を2/19（土）開催します。会場は天満天神繁昌亭。『大淀アニュアーレ』から、進化した創作落語が披露され、落語から着想を得て「絵本の夢」を追う「一枚の絵」入選作も展示します。詳しくは大淀コミュニティセンター・北区民センターでチラシをご確認ください。次のQRコードでも確認できます。

▶アニュアーレ広報HP　https://annuale.net/

扇町マナビバの試み

浪花百景で学ぶ大阪のまち

キタのまちのニュースレター編集室

「浪花百景」は、江戸後期の大坂のまちの様子を、その当時の生活スタイルとともにうかがい知ることができる図版集です。

「浪花百景」それぞれの図絵は、現在の大阪都心部にあたる場所を中心に描かれており、風景だけではなく、闊達で華やかな「天下の台所」と表現された、当時の文化や日常、観光習俗なども読み取ることが可能です。それらはまるで最先端の〝フォトブック〟のようなリアルな情報に満ち溢れています。

このニュースレターでは、大阪大学の橋爪節也先生に主筆をお願いし、これらの図絵にプラスして、大坂（および大阪）の季節感とともに浪花百景を紹介していただいています。（毎号4ページに「浪花百景歳時記」として連載）
その橋爪先生からこんな提案を受けました。……それぞれの「百景」を拡大し完成度の高いタペストリーに仕立て、それを「町並み」のように並べ、あたかも「まち歩き」しているように楽しむことができる「展示」はできませんか？

この投げかけに北区民センター・大淀コミュニティセンターのスタッフが協議し、まちづくり系のNPOなども協力、まず「20景」が完成しました。昨年11月にはスタッフが集まって、北区民センターで展示の予行演習を行いました。不安もありましたが、タペストリーの完成度は高く、様々な角度から楽しむことができ、それらをつなぎ合わせて展示することで（ちょっと大げさですが）幕末の町並みが出現したような感覚を覚えました。

このタペストリーを、3/12（土）13（日）の両日「扇町マナビバ・なにわ百景⇔未来景」というイベントで初お披露目いたします。12日・土曜日13時〜15時には、橋爪節也先生のワークショップも計画中です。

この両日は、フラと環境をテーマにした「マナビバ フラカンファレンス」という催しも同時開催される予定で、この二日間、北区民センターは楽しい「マナビバ」として皆様をお待ちしています。【両イベントとも参加費無料 ／ スケジュール詳細は北区民センター HPにアップします】

※新型コロナウイルスの感染状況によりスケジュールが変更になる場合があります。必ず、北区民センター HPを事前にご確認ください。

ツキイチ屋台から

まちを楽しく使う

建築家・ツキイチ屋台女将　岸上 純子

やっと日常が戻りつつある今日この頃ですが、みなさん日常のありがたみをひしひしと感じておられるのではないでしょうか？　私はそうです。

SNS からは各地で行われているたくさんのイベントの様子が流れてきて、本当にこのままコロナ前の日常が戻ってくることを切に願うばかりです。

コロナの影響なのか分かりませんが、最近本当に多くの屋外イベントを目にします。屋外の公共空間で行われるマルシェや音楽会などです。それらの光景は本当に楽しそうで賑わいがあって、『屋外空間ってこんなに楽しく使えるんだな！』って思わされます。また、このようなイベントが多くなったからか、人々の屋外での過ごし方もうまくなったように感じます。みなさんの中にも、ここ数年の間に余暇を屋外で過ごすことが増えた人も多いのではないでしょうか。

今回は、そんなみなさんにも、また、まだ屋外で余暇を過ごしたことのない人にも、「こんなまちの楽しみ方があるんだ！」ということを知っていただければと思っています。

前回、まちや場を『楽しく使う』ことも『まちづくり』なのではないかという話をしました。でも、どんな場所をどうやって使ったらいいんだろう？　と思いますよね？　そんな疑問に答えてくれる一冊の本があります。

笹尾和宏さんの書かれた「私的に自由にまちを使う―PUBLIC HACK」という本です。タイトルの通り、まち（公共空間）を自由に使っている事例や、自由に使える場所を探すヒントがたくさん書かれています。これを読んでいると、「あ、あの場所って使っていい（自由に使える）場所だったんだ！」と気づかされ、まちを歩くことが楽しくなります。

実際に私自身、笹尾さんの PUBLIC HACK を一緒に体験したのですが、印象的だったのは、それ自体がとても『パブリック』だったことです。どういうことかというと、公共の場を「個人」で使うのではなく、いつでも知らない人も入って来れるような、というか入って来たくなるような場になっているのです。その理由は通りがかる人が「いいな〜」と思うこと！　だと感じました。なんだかちょっとだけちゃんと用意されている場。缶ビールと紙皿じゃなくて、ガラスのグラスとオシャレなトレーが明らかに人数分以上にあったり。それだけで、なんだか「内輪感」がなくなりパブリックに感じるんだと。

みなさんもパブリックな場をパブリックに使うことをやってみませんか？

キタ歩き日本旅

沖縄県の巻

大阪駅前ビルの中には、47都道府県のうち約半数もの道府県事務所が立地しています。それはまるで、ご近所から「旅」の趣です。ここでは北区にいながら日本中の魅力を発見できる道府県事務所の魅力をご紹介。ぜひ体験してください。

復元が待たれる「首里城・正殿」の美しい姿

わしたショップリンクスウメダ店

わした大阪天神橋筋店

2000年にユネスコ世界遺産に登録された「琉球大国のグスク及び関連遺産群」は、琉球王国時代の城（グスク跡）、形式美に抱かれた王家の陵墓、王家別邸だった琉球様式の庭園、海の彼方の理想郷「ニライカナイ」を望む御嶽（ウタキ：祈りの場）から構成され、本島全域に分布する9箇所の大スケール世界遺産群です（本島面積・約1,200㎢／参考・大阪府面積・約1,900㎢、市面積223㎢）。

なかでも「グスク」は、本土の「お城」とはまったくことなる城郭造形が特徴で、美しい「それぞれのグスク」が南北に点在しています。沖縄県大阪事務所の大城史晃さんにお話をお聞きしました。

グスクの中でも、沖縄の心のよりどころ首里城は特別な存在です。ところが、令和元年10月31日未明、首里城火災が発生し正殿（本土のお城の天守閣にあたる建物）を始めとする9施設が消失してしまいました。今現在は「首里城復興」に向け工事が進みつつあります。

この復元には、世界遺産であることから部材の隅々にまで慎重な手立てが講じられることが求められ、年数が必要です。そこで、この過程を共有していただけるよう安全には万全の体制を払いながら「首里城復興モデルコース」という、特別なガイドツアーが企画されるようになりました（現在、5コースの設定）。

この段階的公開とともに、首里城のシンボルでもある赤瓦を再生利用するために「赤瓦漆喰はがしボランティア活動」や様々な復興関連イベントも企画しています。

那覇空港から首里駅までは「ゆいレール（モノレール）」を利用し乗換なしで28分・340円。首里駅から首里城入り口にあたる「守礼門」までは歩いて20～25分です。首里の町並みはとても風情があるので「歩いて」がオススメですが、タクシー利用でもワンメーター約5分（600円ほど）のアクセスです。

2月から3月にかけては、プロ野球やサッカーチームの「沖縄キャンプ」でリゾート地が人気です。その前後、那覇空港到着日・出発日いずれかの半日、空港アクセスが確実な「ゆいレール」に乗り那覇市街を眺望しながら、沖縄の心を体感できる『首里城の旅・半日コース』はおすすめです。

そういえば……北区には沖縄名産の名店「わしたショップ」がリンクス梅田と「天4」商店街にある。大阪には「沖縄の味」を楽しめる名店も数多い。まずは大阪で沖縄のリアルに触れ、旅の計画を練ってみたいと思います！

写真提供：沖縄県大阪事務所／北区梅田1-1-3-2100 大阪駅前第3ビル21階 ☎06-6344-6828〈開館状況は電話またはHPで事前にご確認ください〉

浪花百景歳時記

初夏の田んぼにアーチの橋!?

大阪大学総合学術博物館
研究支援推進員
波瀬山祥子

「鬼子母神」歌川国貞 画

舞台は阪急梅田駅から茶屋町方面へ歩き新御堂筋を東へ渡ったところ、梅田ゲートタワーなどがある大阪市北区の鶴野町。かつてここは南浜村と呼ばれ、「鬼子母神」の愛称で親しまれた安産・子安の神様を祀る「経王山慶住院」がありました。昭和50年代に高槻市の摂津峡へ移転していますが、江戸時代は、遠近から参拝者がしきりに訪れたくさんの供物がお堂の前に並び、近くには茶店もできるなど大変な賑わいをみせていたそうです。

鬼子母神とは、もともと仏教が誕生する前からインドで信仰されていた神様で「訶梨帝母（かりてい・も）」とも呼ばれます。伝説によるとたくさんの子を産む一方で性格は邪悪で常に他人の子を取って食べ人々から恐れられていましたが、仏の導きによって過去の行いを悔い改め、安産・子育の神となることを誓い仏教の守護神となりました。

この絵を見てわかる通り、かつては今の都市景観からは想像もつかないほど牧歌的な景色が広がっていました。水を張った田んぼには空の青が映えて清々しく、田植えが始まる初夏の頃を思わせます。苗がこれから実をつけるように、こどもが無事に成長することを願ってこの季節が選ばれたのか、と私は想像します。

大坂の名所案内記『浪華の賑ひ』（安政2年・1855刊行）に載る図をもとにこの絵は描かれていますが、画家は、本書で見られた門前の茶屋や多くの参詣者を省略しすっきりとした構図に変え、アルファベットの「Z」のように手前から奥にかけて男女の参詣者を連ねて描き、お寺の方へと鑑賞者の視線を誘います。画面左側には、幼い子どもを連れて歩く女性のすぐ先に振り返る男性の姿があり、親子なのだろうと想像させます。家族の楽しげな会話が聞こえてきそうです。

この畦道はお寺へ続く参詣道なのですが、おもしろいのは田んぼの真ん中にアーチ状の小さな橋が架けられていることです。用水路を跨ぐために架けられているのかもしれませんが、わざわざこの形にしているのは、例えば住吉大社の入り口にある反橋と同じように、その先が神聖な場所であることを示す「太鼓橋」を意味しているのかもしれません。

編集後記

今回は創作や表現がメインの記事になりました。北区の会館では絵画や習字、詩吟、踊り、演劇、音楽など、多様なクリエイティブに携わる方が来館されます。本誌ではそんな方々の活動を広めていき、地域の人々が自分に合う表現を見つけられる場所になればと思います。ちなみに私は料理にハマっているのですが、これもクリエイティブでしょうか……？

■編集・発行：北区民センター・大淀コミュニティセンター・都市コミュニティ研究室
■指定管理者：一般財団法人大阪市コミュニティ協会
■発　行　月：7月・10月・1月・4月の各月下旬発行

北区民センター　〒530-8401 大阪市北区扇町2-1-27
✉ kitakumin-center@abelia.ocn.ne.jp
大淀コミュニティセンター　〒531-0074 大阪市北区本庄東3-8-2
✉ oyodo-comini@abelia.ocn.ne.jp